新島襄は伝道師養成学校（ training school）をつくろうとしたのか？

井上 勝也	同志社大学名誉教授
講師紹介〔いのうえ・かつや〕	

海外脱出によって見いだしたもの

今日はようこそおいでくださり、誠にありがとうございます。ただ今から「新島襄は伝道師養成学校（ training school）をつくろうとしたのか」という問題を考えたいと思います。

二十一歳の新島が一八六四（元治元）年函館から国禁を犯して海外に脱出を企てた理由はおよそ三点考えられます。一つ目は封建的桎梏（しっこく）（ pressure）から逃れたいという欲求、二つ目はキリスト教を自由に学びたいという願望、そして三つ目は国家存亡の秋（トキ）に先進国へ赴き、近代科学を学び、国家のリーダーになりたいという大志であります。

彼は一八六五年から七四年まで、アメリカの東海岸のニューイングランドを中心に八年間、ピューリタンの共同体にあって中・高等教育と神学教育を受け、一年以上を岩倉使節団の団員としてアメリカ及びヨーロッパ七ヵ国の教育事情を調査し、教育施設を見学しました。彼はこの間の体験を通して次のような結論に到達しました。すなわち、欧米の近代国家はデモクラシーとキリスト教が車の両輪のように機能し、それらが宗教はもとより政治、経済、文化、教育、社会などあらゆる領域で市民の生き方を規定すると共に、市民は自分の属する社会や国家に積極的にかかわり、主体的に生きていること、もう一つは高等教育機関としての大学が発達しており、卒業生は献身的に社会や国家の機関車役をつとめているということであります。

幕末・明治の留学生たちが留学先で「東洋の道徳」を堅持しながら「西洋の芸術」としての技術を学ぶことに精を出していたのと同じ時期に新島はニューイングランドで西洋の技術を生み出した人間に目を向け、そこに近代国家建設の秘密を見出しました。そこで彼は日本に帰国したら早速キリスト教を全国に広め、大学をつくってデモクラシーを体得し、神を信じ、社会や国家のために献身する人物の育成を畢生の事業とすることを決意しました。帰国後一八九〇（明治二十三）年四十七歳で亡くなるまでの十五年間はキリスト教の宣教と大学の設立運動に邁進する生涯であったといえます。

ラットランドでのお別れスピーチ

さて新島の大学設立運動の出発点は一八七四年十月ヴァーモント州ラットランドのグレース教会でおこなわれたアメリカン・ボードの第六十五回年会でなされた彼のお別れスピーチにあるというのが一般的解釈であります。彼自身も同志社大学を設立するための主旨を文章化する時にこのお別れスピーチの一節をかならず引き合いに出して説明いたします。

たとえば一八八二（明治十五）年の「同志社学校設立の由来」と題する草稿では次のように書かれています。「・・・遂ニ壇上ニ昇リ数千ノ聴衆ニ向ヒ予ノ平素ノ願望ヲ吐露シ、真正ノ教育ニヨラサレハ真正ノ文化ハ期シ難（ガタ）ク、我同胞三千万ヨノ幸福ハ一ニ教育ノ其ノ宜（ヨロシキ）ヲ得ルニ係ルヘケレハ、方今本邦維新変更ノ際苟（イヤシク）モ本邦ヲ愛スルノ士人（シジン）ニシテ豈（アニ）傍観坐視スベケン、予帰朝ノ後必ラス一ノ大学ヲ設立シ以本邦ニ竭（ツク）ス所アラントス・・・」（『新島襄全集』１、三四頁）とこのように申しています。

新島研究者にとって第一級の新島伝であります J・D・デイヴィスの A Sketch of the Life of Rev. Joseph Hardy Neesima, LL. D.（１８９０）ではおよそ次のように書かれています。一八七四年の秋、新島はラットランドでおこなわれたアメリカン・ボードの年会に出席することを求められたので、その前の晩A・ハーディー夫妻に会って日本にChristian collegeを創設するというかねてからの志をお別れのスピーチの中で語ることについてアドヴァイスを求めた。ハーディー氏はうまく運ぶかどうか疑問視していたが、「ジョセフ、この問題は心もとないがやってみるか」といった（p. ３２）とあります。そして同じページで「私はつたないスピーチを終える前に日本にChristian collegeを創設するために即座に約五〇〇〇ドルの寄付の約束がなされた」（ditto）とあり、原文はto found a Christian college in Japanになっています。新島の恩人A・ハーディーの息子であるA・S・ハーディーが編纂しましたLife and Letters of Joseph Hardy Neesima（１８９１）のラットランドの演説の箇所を見ますと、「私のつたないスピーチを終える前に日本にクリスチャン・カレッジを創設するため、即座に約五〇〇〇ドルの寄付の約束がなされた」（p. １７２）とありまして、この部分はデイヴィスの新島伝と同じ表現になっています。

新島が使ったキーワードは？

以上三点の新島研究上の基本資料のうち、日本語で書かれた資料では、帰国したら「大学をつくりたい」という表現になっていますし、英文の資料では「 Christian collegeをつくりたい」となっています。新島のラットランドでおこなった演説の原稿は残っていませんので確認のしようがありませんが、当時の演説を客観的に報道した地元の新聞Rutland Weekly HeraldがO・ケーリ教授のご努力で見つかりました。それには次のように書かれています。さわりの部分を日本語に訳しますと、「神戸の教会はeducational institution（教育機関）をもっていません。しかし或る種の教育機関をもたねばなりません。お金を乞い求めることは日本人の心にとって嫌悪すべきことですが、私はそれをしなければならないと思います。というのはキリストも『求めよ、そうすれば与えられる』と申していますから。したがって私は皆さんにこのtraining institutionを始めるに十分な援助をお願いしたいのです。約三三〇〇万人（の日本人）を助けるための教師と伝道者を育てるために」（『同志社百年史』二、六四頁）。

新島にとってキリスト教の宣教と共に大学あるいは Christian collegeの創設は当時彼の心に秘めた強い願望でありました。しかし彼は諸般の事情を勘案して、アメリカン・ボードの第六十五回の年会ではChristian collegeという表現を直接用いないで、先ほどのtraining institutionという含みをもった表現、すなわち教師と伝道者を養成するための教育機関という表現を使ったのではないか。もしそうだとすれば、それはなぜかといった疑問が湧いてまいります。

一八七四年当時はもちろんテープレコーダーはありませんので、地元新聞の記者は演説の中で用いられるキーワードをメモしつつ、速記術を用いたことが考えられます。現にこの新聞記者はかなり長文の記事を今でいうテープ起こしをしたかのように克明に書いています（同前、六一－

六四頁）。もし新島が演説の中で Christian collegeというキーワードを使ったとすれば、新聞原稿にはtraining institutionではなく、Christian collegeと書かれたはずであります。

「伝道師養成学校を」と語った五つの理由

そこで考えられる諸般の事情ですが、一つ目はデイヴィスの新島伝の中にありましたように、新島はお別れスピーチの前日にアメリカン・ボードの最高責任者であったハーディーに会って日本に帰国したら Christian collegeをつくりたいので聴衆に寄付を訴えてもよいか、アドヴァイスを求めました。ハーディーは「おぼつかないと思うがやってみるか」といった消極的な意見を述べました。外国伝道の責任者であるN・G・クラークにも相談したようであります（O・ケーリ「ラットランドと新島襄と同志社」二一五－二一六頁、北垣宗治編『新島襄の世界』所収）。彼がどのような返事をしたか、明らかではありませんが、新島のChristian collegeの創設に積極的に賛成するといったような返事は立場上できなかった筈です。この二人の発言は新島にとって重いものがあります。二番目に考えられますことは新島自身が外国に宣教師を派遣し、キリスト教を宣教しようとする団体であるアメリカン・ボードの宣教師（厳密には宣教師補ですが）であるという立場から、ボードの宣教の基本方針に従う義務があるという点であります。三番目はラットランドの教会にアメリカ全土から集まった千数百人はボードの関係者とグレース教会や近隣の教会の教会員ですから、これらの人達に日本に帰ったらChristian collegeをつくりたいので寄付をしてほしいというのは唐突の感があります。ボードの基本方針はキリスト教が宣教されていない地域や国々にキリスト教を宣教することが第一の目的であり、Christian collegeをつくることは宣教との関係で副次的に考えられるべきことだからです。四番目の理由は各地で活躍する宣教師たちはChristian collegeにボードの予算をつぎ込むよりも彼らの手足となって働いてくれる現地人の伝道者の養成機関training schoolをつくることを優先すべきであると考えるからです。五番目の理由は一八七二年にボストンで大火があり、ボードへの寄付金が減っていることがあげられます（吉田亮「アメリカン・ボードの日本伝道・教育観、アメリカン・ボードから見た京都トレーニング・スクール」一〇〇頁、『異文化交流と近代化』所収）。慎重な新島は一晩かかって考えた末にボードの年会でのお別れスピーチにはChristian collegeという直接的な表現を避け、training institutionという含みをもたせた表現を使ったのではないかと私は考えています。

学校設立にあたって

一八七四（明治七）年十一月、新島は十年ぶりで祖国の土を踏み、彼の畢生の事業でありますキリスト教の宣教と、学校設立の準備を始めました。彼は翌一八七五年一月、神戸でおこなわれた日本伝道部（ Japan Missionと申しますが、先ほどのN・G・クラークによって一八六九年につくられました）の委員会に出席し、彼の学校構想を述べています。そしてこのとき、日本人伝道者のためのtraining schoolに関する決議がなされました。この学校は福音伝道に従事する青年を最良に訓練するために科学（science）と神学の研究を兼ねて教える高等神学校（collegiate theological institute）のようなものであった（吉田、同前、九六－九七頁 Missionary Herald, May　１８７５，　p.１６６）と書かれています。

新島は彼の気持ちを最もよく理解しているハーディー（ハーディーはアメリカン・ボードの運営委員会議長ですが）に先ほどの委員会が開かれて二ヵ月後の一八七五年三月に次のような手紙を送っています。「私はトレーニング・スクールに加えて高等教育機関（ collegiate institution）をもたなければ、我々の仕事はうまくいかないだろうと思います。私はこのことをこの前の委員会（一月）で懇願しました。しかし宣教師たちはトレーニング・スクールだけにこの基金（新島が前年ラットランドのボードの年会でアピールしたときに聴衆から寄付の約束を得た五〇〇〇ドルのこと）を用いることを望んでいます。もし彼らが知識を求める若者たちの切望を満足させるためにどんな科目をも教えるのであれば、喜んでこの意見に賛成します。もし神学と聖書しか教えないのであれば、もっともすぐれた日本人青年たちは我々のもとに留まらないのではないかと思います。彼らは近代科学をも求めているのですから」（Life and LettersＬ，p. １９５）。この手紙から新島の学校構想と宣教師たちのそれの間にかなりの温度差があることがわかります。人間形成に必要な幅広い科目をより多く開講しようとする新島と伝道に必要な科目を多く開講しようとする宣教師たちとの意識のずれが表面化しました。

夢を実現させるための忍耐と努力

新島が一八七五（明治八）年八月、京都府庁に提出した「私学校開業願・外人教師雇入につき許可願」を見ますと、願書に見られる私学校は同年一月の日本伝道部（ Japan Mission）で決定された「福音伝道に従事する青年を最良に訓練するために科学（science）と神学の研究を兼ねて教える高等神学校」ではなく、中等教育機関としての英学校であり、当初カリキュラムに入っていた聖経、すなわちキリスト教の科目も最終的には削除されて、修身学が代行することになりました。これは開校直前になって「学校では聖書を教えてはならない。但し私宅ではよろしい」という京都府権知事植村正直の指示に従って、カリキュラムを修正したからです。デイヴィスを始め宣教師たちの要望が後退して新島の構想が表に出たカリキュラムであるといえます。新島は聖書の授業を軽視したわけではなく、建て前上、英学校のカリキュラムを京都府庁に提出しながら、別に学校の敷地外にある元豆腐屋の二階を使って聖書の授業をやることにしました。そして一八七六（明治九）年の秋から「余科」という名称の神学特別コースを設けて、とりわけ熊本洋学校の課程を終えて、或いは終える寸前で同志社英学校に編入学してきた学生たちのために伝道者や牧師の養成を目ざすことになりました。もっともおおっぴらに授業が行われたのではなく、京都府学務課の役人の監視の目を盗むといった困難さをともなっていました。

一八七九（明治十二）年九月新島はアメリカン・ボードの運営委員会宛に長いアピールの書簡を送っています。その中で彼が日本伝道部（ Japan Mission）に属する宣教師たちに対して強い不満を抱いていることを率直に述べています。「我々の善良な宣教師の友人たちは聖書をあまりにも多く教え、科学的な教授をおろそかにしてきました。将来有望な若者の多くは大変失望し、東京の学校に行くために我々のもとを離れて行きました。そこでは彼らはキリスト教の影響を受けないでしょう。我々はこれらの有望な若者たちを失うことはできません。我々は彼らに十分で高度な職業教育をキリスト教教育と同様に与えることによって、彼らを学校につなぎとめなくてはなりません」（Life and Letters, p. ２２８）。そしてこのアピールの書簡の最後で次のようにつけ加えています。「もし私がクラーク博士（Ｎ・Ｇ・クラークのことですが）の立場なら、私は日本に強力なキリスト教主義の大学（strong Christian university）をつくることにあらゆる努力をするでしょう。クリスチャンの牧師、クリスチャンの医者、クリスチャンの政治家、そしてクリスチャンの商人をさえ育てるために」（pp. ２３８－９）。この書簡で新島はアメリカン・ボードの中枢にいるハーディーやクラークを意識して本心を語ったといえます。

さて、同志社英学校は外見は新島襄の学校でありましたが、しかし実質はアメリカン・ボードの、そして日本伝道部の学校であり、教師の給料や学校運営費の九〇パーセントはボードからの送金に依存していました。宣教師たち、そして彼自身も宣教師であった新島がアメリカン・ボードの本部に送る報告書には Doshisha English Schoolではなく Kiyoto Training Schoolという名称が使われていました。新島の大学構想が具体化し、宣教師から運営資金の管理が新島にゆだねられる一八八八（明治二十一）年になってやっと、名実共に新島の英学校になったといえましょう。一八七五年の英学校創立後新島は大変な忍耐と努力を続け、少しずつ彼の夢を実現していきました。

新島が目指していたこと

新島は一八八二（明治十五）年「同志社大学設立之主意之骨案」で「宗教並ニ哲学ヲ授クルノ目的ハ克ク造化ノ妙理ト人間ノ要道ヲ探ラシメ」と述べています。彼は医者であれ法律家であれプロフェッショナルを目指すものは等しく「造化ノ妙理ト人間ノ要道」すなわち、万物を創りたもうた神の巧みさや人間が生きていく上で欠くことのできない大切な教えに精通することが大前提であると考えていました。彼の Amherst College時代、学問、人格両面で強烈な感化を受けたＪ・Ｈ・シーリー教授が彼の学長時代の一八八〇年代に将来牧師を志望する学生からヘブライ語をとるべきかそれとも化学（chemistry）をとるべきかと問われた時、いずれはヘブライ語をとらねばならないが化学をとるように指導しました。このような学問的風土のAmherst Collegeで学んだ新島はキリスト教の伝道者は単にキリスト教の指導者にとどまらず、世の中の動きを的確に把握しつつ、人間如何に生きるべきかを広く指導しうる能力と人格をもった宗教家になることを望んでいたのです。従って彼は宣教師たちが短期間にキリスト教徒の数を増やすという成果主義を急ぎ、即戦力の育成を重視した狭いカリキュラムをもった伝道師養成学校（training school）をつくろうとするのに対して、まず伝道者の人格を磨くことを最優先し、広い教養の上に伝道者に必要な専門知識と方法を学びとったプロフェッショナルの育成を目指したといえます。今日の私のお話は、「新島襄は宣教師の考えるような伝道師養成学校（training school）をつくろうとしたのか」という問いに対して、私はNO！と申しあげたかったのであります。

ご清聴ありがとうございました。

参考文献１　吉田亮「アメリカン・ボードの日本伝道・教育観－アメリカン・ボードから見た京都トレーニング・スクール設立の意味」『異文化交流と近代化』一九九八所収

２　本井康博「アメリカン・ボードの伝道方針と新島襄－トルコ・ミッションと日本ミッションを対比して－」『キリスト教社会問題研究』五十四号、二〇〇五、十二

二〇〇六年六月十六日　同志社スピリット・ウィーク「講演」記録